

第52回 Kozoom28 「秋の花に思う」

清水健二

第50回「夏の花の思い出」に続いて、今回は秋の花のことや、今も印象に残っている私の撮った思い出の写真を添えてみたい。

(1) 彼岸花（曼珠沙華）

今年は秋の彼岸が来ても記録破りの猛暑に襲われ、「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉通りにはならなかったが、気温の変化に関係なく、不思議に彼岸の頃になると彼岸花が咲き9月末から10月に入って満開となった。子供の頃母親に連れられて墓参りに行くと墓地のあちこちに彼岸花が咲いていて、母が毒だからむやみに



彼岸花と大和三山

に触るんじゃないと言われた。当時はまだ土葬が多く盛り上がった土の真ん中に古びた木の卒塔婆（そとうば）が立っていたし、子ども心に怖く、燃えるような真っ赤な花に恐れを感じた記憶がある。農家出身の母は田んぼの畔に咲く彼岸花は、稲を食い荒らすネズミやモグラなどが球根に含む毒素で近寄らないのだと教えられた記憶がある。近年は農薬を散布するお陰で、ネズミやモグラ、バッタやイナゴまでいなくなってしまった。彼岸花の球根は長く残っていて、毎年花が咲き黄金色に実った稲と真紅の花が見られる。最近では赤色の他に黄や白の豪華な花も増えて、あちこちで見事な花の群生が見られ観光にも役立っているようである。私は写真のクラブに入っていて、仲間たちと近場のみならず遠出して撮影を愉しんできた。

金剛・葛城連峰の奈良県側に古代葛城王朝の跡があって、山麓沿いに「かつらぎ古道」が通っている。その途中に九品寺（くほんじ）という古刹がある。境内から東に大和三山（北から耳成山、畝傍山、香久山）が展望できて、朝日の上る光を受け

て輝く彼岸花は圧巻である。

また明日香村は日本の歴史発祥の地で、蘇我馬子の墳墓石舞台がある。その東奥に棚田が広がる稲渚の地は見渡す限り彼岸花が咲き訪ねる人も多い。毎年「案山子祭り」が開催され、近郊に住む人たちが案山子を制作し、コンテストに応募しその中から選ばれた作品が棚田道に披露される。少なくとも50~60人の出品作品だから、100以上の案山子が揃い、それぞれがユニークで見ているだけで楽しい。

(2) 萩の花

日本古来から愛されていて、小粒の花は薄い赤紫色のものと白いものがある

無数の花をつける。万葉集にある約4500首のうち最多の140首が詠まれているのである。梅の花もよく詠まれているが118首というから、萩の花はかなり人気があったのだろう。

「高円の 野辺の秋萩 な散りそね
君が形見に 見つつ偲ばむ」などは心に残る歌である。私は若草山の南にある高円山の麓に白毫寺への道が好きでよく出かけたものである。白毫寺山門へ通ずる石の階段を埋めるように、萩の花が咲いて一服の絵を見る景色に深い印象を受けた思い出がある。



彼岸花と日の出(九品寺より)



明日香の案山子祭り



奈良白毫寺の萩の花

(3) すすきの花

すすきの穂は花の集まりと言われているが、日本中何処へ行ってもみられ、中秋の名月にはすすきに団子を供えて観月を楽しむ習慣が昔からある。都会ではすっかり忘れ去られているが、自然と共に生きてきた日本人は、自然に感謝し日々の暮らしに喜びと祈りを捧げてきたものである。すすきの穂は晩秋には金波から銀波に変わり、冷たい風に靡く風景に「わびやさび」に通ずる世界を感じ、詩情を覚えるから不思議である。



若草山のすすき

奈良若草山の頂上はすすきが群生して、秋の夕暮れ時に眼下に大仏殿の大屋根や興福寺の五重の塔が遠望でき格別に美しい。何度か通って写真にした思い出が蘇ってくる。また約1300年前に奈良の都、平城京のあった跡地は、南北4.3 km 東西4.8 kmの広大な面積が整備されて世界遺産になっている。至る所にすすきが群生し、その中に大極殿と朱雀門がぽつんと建っている。東に若草山や、高円山などが遠望され、西には生駒連峰が見える。夕日に染まる頃は雄大な自然の景色に絶句するほどである。すすきが原は都会を離れて小高い山や高原に行けば、どこでも出会えるから秋を味わえて楽しめるのが良い。



平城京朱雀門とすすき

(4) 秋桜（コスモス）の花

コスモスは日本古来の花ではなく、明治の初めにイタリアから渡来したが日本人好みの花柄や色が気に入ったようで広く普及した。特に近年減反政策から休耕地に植

えられ、人々の目を楽しませている。
奈良県斑鳩町に在る法隆寺の五重の塔、
法輪寺の三重の塔、そして現存する最
も古い木造三重塔を有する法起寺（ほ
っきじ）の斑鳩三塔の中で、法起寺の
周りの田園地帯はコスモス畑が広がっ
て、古塔がコスモスに囲まれて浮かび
上がって建つ景観や、夕日に花が輝く
光と影の情景が良い。何時行ってもカ
メラマンが並び垂涎の的になってい
る。また初冬の頃、野焼きする煙の中
に枯れ残ったコスモスはタイミング
が合わないと写真にするのが難しい。
幸い過去に撮った私の拙い写真をご
披露したい。

(5) 菊の花

8～9世紀の平安時代に中国から伝わって貴族に愛され、近年は花好きな人は子菊か
ら大輪の花まで、種類はおびただしいほど多く、色合いも新種を作ろうと栽培に手
間ひまかけているから増える一方であ
る。

もともと菊は後鳥羽上皇が刀に菊の紋
を入れたことから、皇室の紋章になっ
たという。そして薬用植物として栽培さ
れる他、邪気を払い長寿と繁栄を象徴
する花としても重宝され、今日まで引
き継が



秋桜畑と夕景（法起寺）



秋桜畑の野焼き（法起寺遠望）



平群の菊畑

れてきている。南北朝時代河内の国の豪族だった楠木正成は南朝の後醍醐天皇から功績の証として、菊のご紋を授けられたが、畏れ多いと菊の半分を水に流し菊水紋にしたと言われる。今では類似の紋章が使われているのを見かけるほどに普及している。

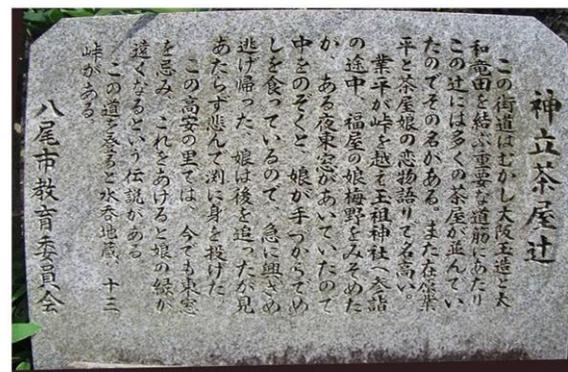
私の菊に対する関心は、難波から大和へ向かう山越しの道として生駒山の南にある暗峠(くらがりとうげ)である。松尾芭蕉が最後の旅になったこの峠で詠った俳句、「菊の香に くらがり登る 節句かな」が思い出される。私の住む八尾市から生駒・信貴山系を越えて



楠公の碑 (千早赤阪村)

奈良県平群(へぐり)へ向かう山道に十三峠がある。暗峠の南に位置し平安時代の

歌人在原業平が、山越えて河内の国に居る好きな女性に会いに通ったという。今でも鄙びた山道は良いハイキングコースになっていて、平群地区は以前から花づくりが盛んで、近年この地域は花で経済が成り立っている。四季を通して桃源郷の美しさを味わえるところで、さぞかし業平もこの山道を



在原業平の碑 (八尾市)

好んで歩いたことだろうと想う。道沿いにかつて茶屋があって石碑が建っている。私の親父は晩年、菊づくりに精を出し家の裏庭で春から育て始めて、秋の菊花展に向かって励んでいた。今でも大きな鉢が庭の片隅に積み上がったままで放置され私は処分をためらったままである。誰でも菊づくりが楽しめ、あちこち菊人形など遊園地で見かけるのも日常の暮らしの中に溶け込んでいるからだろう。

秋の花、5題を書き綴ったが、在住する河内の地や奈良近郊以外に、他県で出会

った花々から連想ゲームのように思い出させる魔力が、どの花にもあるように感じている。花についての続きはまたの機会に譲ることにしよう。

令和6年10月 記